

コロナワクチンの複数回接種がコロナ感染を招く？！

新型コロナウイルス感染症流行の波がようやく一段落し、市民生活の活況が戻ってきており、2024年4月以降は治療費やワクチンの公費支援がなくなるなど、コロナ禍も一定の節目を迎えています。

この4年間、ほかの社会問題を圧倒して、社会を揺さぶり続けたのもかかわらず、ワクチンの関する議論は極めて少ないように思われます。

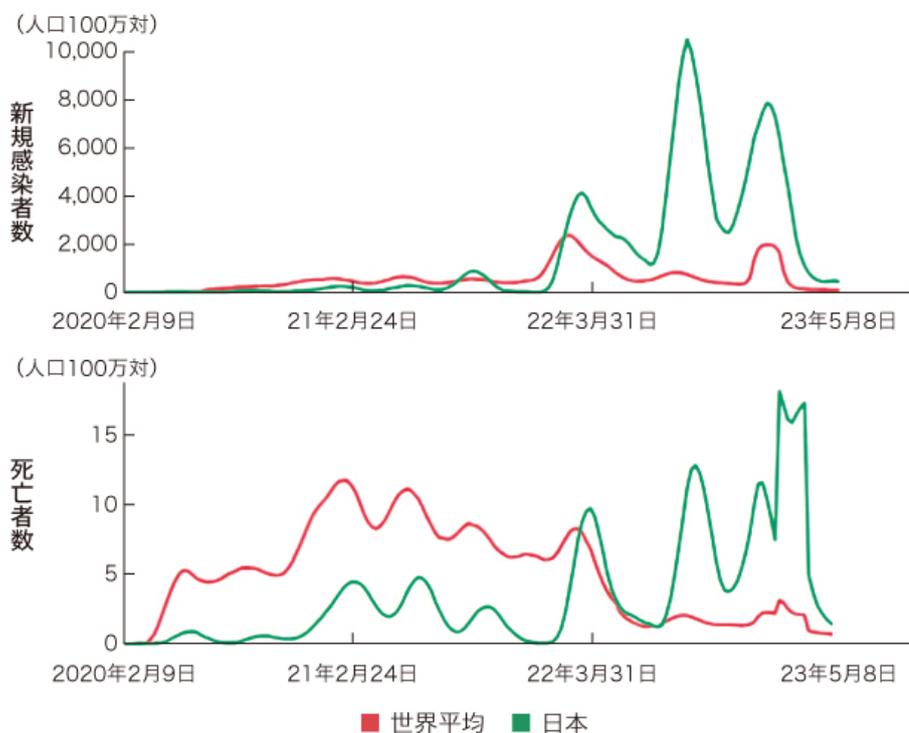
流行時期とワクチン接種率の”不整合”について、JOHO 東京山手メディカルセンター呼吸器内科・徳田 勉先生のメディカルトリビューン誌への寄稿記事を基に、これからのコロナ感染予防策についてまとめたので、ご一読いただければ幸いです。

ワクチン接種率が世界第一位にもかかわらず、第7・8波とも感染者数が世界最多であった！

クリーブランド・クリニックの研究の成果は、疫学データとして揺るぎのない価値があると評価できますが（本論文の掲載誌は、米国感染症学会の公式誌で、十分に格の高い雑誌です）、それによると、

- ① ワクチン接種の感染予防効果は見られず、
 - ② ワクチン接種後も死亡数が増加し、期待された重症化の予防効果も認められていない
- という衝撃的な結果でした。

世界と日本の新規感染者数と死亡者数



(Our World in Data より引用)

mRNA ワクチンは自然免疫と獲得免疫のいずれにも負の影響！

上記のクリーブランド・クリニックの研究成果の理由として、以下の三つの免疫学的な考察が挙げ

げられ、いずれも免疫学の領域で権威のある雑誌に掲載されています。

- ① 同じ系統のワクチンを連続して接種すると、2回目以降の免疫応答が起きにくくなる。”
免疫の刷り込み現象”が生じている。
- ② 同じ系統のワクチンを連続して接種すると、免疫グロブリン：IgGのサブクラス変化（クラススイッチ）が引き起こされ、免疫力が弱まる。
感染防御を担うIgG1及びIgG3が減少する。
- ③ 同じ系統のワクチンを連続して接種すると、I型インターフェロンの応答が減弱し、自然免疫が抑制される“免疫変容”が生じている。
自然免疫の変容

ワクチン接種後もリスク回避行動は疎かにならない！

ワクチンの複数回接種の効果を過信しないで、

- ① 風通しを良くする
- ② むやみに人ごみに出ない（ソーシャル・デスタンス）
- ③ マスクの着装
- ④ 手洗いの励行
できれば、
- ⑤ パルスオキシメーターでの血中酸素濃度の測定で肺機能を把握する。
という基本を忘れないことです。

（投稿者：蓮田市自治連合会顧問 薬学博士 宗像 敬一）